

「こどもの検査値ノート」が7年ぶりに改訂された。臨床検査の領域で働いていて感じさせられることは、医療のさまざまな領域で新生児、小児に関する部分への配慮が、一般的に足りない点である。例えば、近年、発達著しい臨床検査分析機器についても、小児専用機器の開発は皆無であるといっても過言ではない。また、検査項目についても、現行の医療保険制度のなかで保険適用として収載されている臨床検査項目を概観してみると、新生児の遺伝性疾患に必須な検査項目が収載されていなかったりする。一方で、代表的な生活習慣病である糖尿病などについては、手厚くさまざまな角度から検討できるように検査項目が充実している。さらに、第2版の序文に編集者が書いておられるが、日本人小児の臨床検査に関する専門書がほとんどないのも、新生児、小児医療への関心の薄さを示している1つの反映であるのだろう。そのようななかで小児医療に長年携わってこられた戸谷、宮坂、白幡の諸先生方が編纂されている「こどもの検査値ノート」は非常に貴重なものである。

この本はポケットサイズで小児医療にかかわっている方々の白衣のポケットに収められるもので、常時携帯可能であること、また検査項目が臨床化学、内分泌、免疫、血液、凝固項目などについてはもちろんのこと、尿、髄液についても、さらには生理検査までも含んでいることから、この1冊があれば、日常の新生児、小児の診療には不自由はしないはずである。

検査項目の記載に工夫が凝らしており、検査項目の分類、使用すべき適切な検体の種類、基準範囲、測定法、その単位とそれぞれ明確に区分して簡潔に記載してある。各項目はすべて2頁以内にまとめられている。それゆえに、調べたい項目を探して頁を開けば、その見開きの頁だけで知りたい検査項目についての情報をすべて知ることができるようになっ

ている。この工夫は日常診療のうえでは大変便利がよいはずである。しかも、各項目について参考にした主な文献が厳選して記載してあるので、詳細な検索もできるようになっている。

要するに、非常に実用的な小児医療に関する臨床検査のバイブル的な書である。小児医療に携わっている方々は新人からベテランまで、常に携帯されることをお勧めする。

このような貴重な著書であるがゆえに改良していただきたいことを最後に記しておく。初版で編集代表者の戸谷先生も述べておられるが、ここに挙げてある基準範囲は厳密に言えば基準範囲ではなく、単なる目安にすぎないことである。

新生児や小児を取り扱うことの性格上、病気でない子どもたちからデータを集めるためだけの目的で検査を行うことは許されないことである。それゆえに、基準に則った基準範囲を決定できていない。しかしながら、基準範囲の整備は診断・治療基準の設定には必要であり、基準範囲の設定は必須の要綱である。

このジレンマを解決する1つの方法は外来患者データを利用して基準範囲を決定することである。数千から数万の個体データを蓄積し手順に則って統計処理をすることで、信頼できる基準範囲を決定することは、すでにほぼ証明されている。臨床化学会、臨床検査医学会や小児科学会などが協調して全国規模で外来患者データを集め、信頼できる基準範囲を設定することは不可能ではない。本書の編集者が音頭をとって新生児、小児の成長過程における基準範囲を整備され、さらに進化した「こどもの検査値ノート」(第3版)に近い将来出版されることを祈念している。

(B6変型 256頁 定価2,730円(本体2,600円+税5%))
(2004年 医学書院 刊)